

## 孤独死と向き合う職人たちが、不幸と死臭に気持ち揺らぐことも

**家族**に見守られて天寿を全うする人もいれば、孤独のうちに亡くなる人も。遺品整理屋という職人は主に後者の故人、遺族と対面する。その遺品整理屋の草分けであるキーパースは年間1800件もの仕事を請け負っているが、そのうち9割が一人暮らしの中高年世帯にまつわる仕事。また半数は孤独死なのだとか……。

「私たちは遺族の依頼を受けて、遺品の整理を行い、形見分けとなるものは遺族のもとに届け、不要なもの処分する。でもそれだけに終わらない仕事も多い。孤独死の後、しばらく誰にも気づいてもらえない「要死」というケースも多いんですから」

キーパースの社長、吉田太一氏の言う「要死」とは、我々には想像もつかない現場だ。時に蛆虫と小バエが溢れ、体液の染み込んだ布団や床から溢れ出る死臭が、部屋はおろかマンション中

に充滿していることも……。

ある年の夏場、死後1か月もたつて発見された故人の住まいの遺品整理を請け負ったときのこと。体が布団から半分ずれていたためか、フローリングの床と布団にまたがって、ひと形の茶褐色の染みが現場にはできていた。その現場で、キーパースのスタッフが転び、茶褐色の物体が背中へとつりと付着してしまつた様子が、吉田氏の著書に綴られている。その物体とは「体液」というよりも人間そのもの「だった」。「強烈な死臭を放つ部屋には、遺族の方も入りたがりません。そんな部屋に入って、蛆を殺虫剤で殺して、内装の洗浄、死臭の除去まで行うのもわれわれの仕事です。誰もやりたがらない仕事です。でも、初めの4年ぐらいいはこの仕事を続けるべきか悩んだんです」「時間がないうちに遠方だから駆けつけら

れない」という理由から依頼が舞い込むことは頻繁。立ち会いを拒んで、部屋の鍵だけを渡して立ち去る依頼人や、「切かわりたくないのですべて処分して下さい」と遺品に無関心な依頼人もいる。本来なら故人を葬る最後の儀式でもあるはずの遺品整理、これを専門に請け負うことは良くないことなので、と考えてしまつたそう。

遺品整理屋にはこうしたシレンマが生じることも。それだけに、誰にでも務まる職業とは言えないそう。

「本当にどうしようもなく、ウチを頼るご遺族も多いんです。言つてみればウチのスタッフはすぐりつく、墓のようなもの。優しさはもちろんなこと、使命感がないとやっていけない。求めるものも大きくなり1000人ぐらい面接しても1、2人しか採用できない」

資格の要る専門職ではないため、誰にでも遺品整理屋の門戸は開かれている。が、現場の凄惨さに怖じ気づくようでは務めを果たせない。遺族とともに涙してしまつても同じ。仕事と割り切るには荷が重すぎる現場で、職務を全うするには遺族の精神的な重荷を背負える使命感が不可欠というわけ。

この職人たちには遺族の期待だけでなく、死臭もつきまとう。吉田氏曰く「死臭としか表現できない」におい。このにおいは周辺住民を悩ますこととなる。「仕事終れば作業服は死臭まみれとなり、体にかけて染みついてしまつことも。だが、あまたの現場をこなすと体調には変化が。4年ぐらいいしたら、死



遺品整理の現場には、腐敗の進んだ遺体から体液がはれ、びしょ濡れが臭いにおいも、とろとろ

### 遺品整理屋file

**業務** 遺品の整理とともに故人の住まいの原状回復を行う。遺品のうち不要なものは有料で処分するか、リサイクルすることも。作業費用は平均30万円程度（死臭の脱臭作業は別途）

**募集** 主にホームページ上で採用募集を実施。キーパースでは常時、採用活動を行っているが、100人の応募があつても、採用するのは1、2人。遺族の重荷を背負う強い使命感が要求される

**報酬** キーパースは月給25万円～、過酷な業務を考えれば決して高くないが、それは報酬目当ての就職希望者を望まないため



「遺品整理屋は見た!!」(小社刊)には、特に印象深い現場の話が綴られている

体調には変化が。4年ぐらいいしたら、死

臭を嗅ぎ取るのと体がカッカしてくるようになったんです。具合が入るためかと思つたんですが、どうも体温が上がつて熱気で死臭を寄せつけなくなつていたのかも」

「ここまでいけば一人前の遺品整理職人か。ただし、そこに達するには常人には計り知れないほどの悲しい現場に立ち会い続けなければならない。」



キーパース 代表取締役 吉田太一氏

遺品整理屋の草分け。本業以外に孤独死を防ぐための啓蒙活動も展開。近著に「おひとりさままでだいじょうぶ。」(ポプラ社)